

「文化」に関するさまざまな講義を担当して

境 邦 夫

はじめに

本学に人間科学部人間文化学科が誕生したのは平成12年4月のことであった。長年、地元広島の新報社で記者生活を送った筆者は、この人間文化学科の発足とともに教員として参加させていただき、以来7年間にわたり「文化」に関するさまざまな講義を担当してきた。残念なことに当学科は平成19年3月をもって廃止となる。しかし振り返ってみると実に楽しく充実した年月であった。教育と研究。学生たちを指導すること、そして自分の専門的分野の研究をすることは新米の教師には難題ではあったが、その両方から大きな生きがいや喜びをもらったからである。

初講義は「現代文化論」

教壇に立って始めて担当したのは、人間文化学科に入学したばかりの1年生を対象とした「現代文化論」であった。新報社時代、編集局文化部というセクションで仕事をしたことがあり、「文化」や「現代文化」についてはいろいろと思うところはあったが、一回きりの講演などは違い1年間30回にわたって系統だって講義するとなると、しっかりとした組み立てが必要だ。自分なりに全体の項目を立ててはみたものの、それで十分なのか、気になる。そこで最適なテキストを探そうと書店や図書館などをあたったが、見つからない。次第にわかったことだが、「現代文化」を論じた書籍はほとんどないのである。今ではパソコンによる検索にもかなり慣れたが、当時はそれもできず、せせせと図書館に通い数十巻もある膨大な図書目録を開いた。するとある日、「現代文化を学ぶ人のために」(世界思想社刊)という本が目にとまり、中を開くと講義にぴったりの内容なのでテキストに採用した。内容は、現代文化の特色を「都市」「消費」「情報」「グローバル」の側面からとらえ、後半では「ジャーナリズムのまなざし」「文学の現在」「旅行文化の発展」「ファッションという制度」などのやわらかいテーマで各論を展開している。このように扱う領域が多岐にわたるので執筆の先生方の専攻分野も文化社会学、教育社会学、哲学的人間学、都市社会学、日本近代文学、映像文化論、メディア文化論、宗教社会学、観光文化論、女性学など多彩だ。もっとも多いのは社会学の研究者で、「文化」へのアプローチ法として社会学が有力な武器となることは予想通りであった。この書籍をベースに自分の知見を交えて講義を進めた。学生たちにも好評で、「現代文化」を理解するには最適なテキストだったと思う。

哲学の重要性を痛感した「人間と文化」

2年目に入ると、2年生と新1年生が誕生、各教員とも受け持つ講座が増えた。筆者も「人間と文化」「地域社会と文化」「比較文化論」「人間文化専門演習」などの担当となった。この中で講義の組み立てに苦心したのは「人間と文化」である。「人間と文化」という題目を見て

思うこと、話したいことは多くあるが、扱う領域があまりにも広く漠然としている。そこでこの際はぐっと哲学的に、人間文化の基層に焦点を当てようとするうち「人間と文化」（九州大学出版会刊）という題名もずばりの専門書が見つかった。構成はギリシャ思想、近代自然科学の成立、知識、言語と思考、行為、信仰の6章からなり、これら人間と文化の基礎を織り成している6つの主題について哲学的な考察を試みるものである。難解で、実際には役に立たず無用の学などと揶揄される哲学は、逆に言えばそれだからこそ興味深い学問といえる。学生たちは当初は戸惑いを見せた。だが次第にこの理論詰めで、執拗な性格を持つ学問に関心を示してくれた。たとえば、人間はどのようにして知識を身につけるかといった命題に、フランスのデカルト（1596-1650）ら生得観念論者は「われわれは観念を、見るとか触るといった感覚的経験がなくても自然に持っているのだ」とするのに対してイギリスのジョン・ロック（1632-1704）ら経験主義者は「人間の心は生まれたときは何も書かれていない白い紙だ。その後の感覚的経験によって知識を得る」——といった哲学史上の有名な論争があった——といった「知識」の話、また「言語は思考内容を運ぶ手段というのは誤り。思考内容は言語をマスターすることではじめて獲得される」といった「言語と思考」の話に学生たちは身を乗り出して聴いてくれたのである。

記者経験が生きた「地域社会と文化」

「地域社会と文化は」は、広島や中国地方の事例を見ながら地域社会における文化の意味、役割、また地域文化が抱える課題などを考えるものである。具体的なテーマとして①方言②民俗文化③ある事業家（大原孫三郎）が生んだ壮大な地域文化④食文化⑤地域と芸術活動⑥地域とスポーツ文化⑦中央文化と地方文化⑧地域文化の見直し⑨行政の文化化⑩地域文化の将来——などを掲げた。この講義は地方新聞で取材活動をしてきた筆者にとっては取り組みやすいものがあり、実際に見聞した具体例を多く語ることで生き生きとした講義になったと思う。一例を挙げると大原孫三郎の話である。倉敷紡績、倉敷レイヨンなどの大企業経営者としてだけでなく大原美術館、大原社会問題研究所、大原農業研究所、倉敷中央病院など時代を先取りした数々の文化事業を起こし、地域社会に大きく貢献した。その彼も若いときは代々続く資産家の御曹司として放蕩無頼の生活を送ったが、あるとき孤児救済に奔走する熱血の慈善事業家に会って正義感にあふれるヒューマニストに変身、経営者となってからも人間的にあたたかい経営を貫いた。後に「自己の富を散じて公共の事業をした点で三井、三菱も及ばぬ偉大な結果を生んだ財界人」（経済学者・大内兵衛）と評価された人物である。記者時代、取材で何度も倉敷を訪れ、関係者から孫三郎の話聞いていた筆者の講義は学生たちにも親しみ深かったようだ。

フィールドワークと卒業研究

3年目、4年目に入ると私たちの学科も3年生、4年生が誕生し私の受け持つ講義もさらに増えた。従来の科目に加えて「芸術文化論」「広告研究」「地域社会とまちづくり」「日本文化研究Ⅲ——沖縄フィールドワーク」「卒業研究」などが新たに加わった。これらの中で思い出深いのは、「沖縄 FW」「卒業研究」である。「沖縄 FW」は毎年3月、4泊5日の日程で沖縄を訪問、沖縄の歴史、文化、民俗などを多角的に研究するものである。沖縄は民俗文化の宝庫といわれ、また最近では観光地としても人気の高いところ。しかし学生たちはあくまでフィールドワークに出かけるのであるから、「研究旅行なのだ」という心構えをしっかりと持ってら

うことが大切なので事前学習に力をいれ、また現地では琉球大学まで足を運び、同大学の民俗学の教授から講義を受け、そのあとで各地を精力的に回った。参加学生は毎年10人-20人で、各自テーマを絞って観察、調査することの難しさや面白さを知ってくれたのが収穫だった。「卒業研究」は「卒論」作りのことで、本学科では選択科目である。筆者のところにも、毎年3人から6人ほどの学生が押しかけてくれて、「携帯電話と若者の生活」「60年代のイギリスファッション革命」「東京デイズニerlandー日本に受け入れられたアメリカ文化」「観光産業とホスピタリティ」といった人間文化学科らしい興味深いテーマを学生各自が設定した。卒論作製は多くの先行研究を調べて自己の考察を深め、さらにそれを長文の論文に仕上げてゆくものであるが、やり遂げるには相当の根気、エネルギーが要る。学生たちは何度も壁にぶつかり、途中で投げ出しそうな場面もあったが、みんなやり遂げた。文章作成の技術的な指導面で記者経験を生かすことができたのもうれしいことであった。

勉強になった「公開講座」

本学では地域の社会人の方々に本学教員の日ごろの研究成果を知っていただき学問・芸術の奥深さ、面白さの一端を味わっていただければ、と毎年さまざまなジャンルの公開講座を開催している。その中で筆者は「エッセイ入門—鑑賞と創作」「沖縄学へのいざない」の2つの講座を数回にわたり担当させていただいた。「エッセイ入門」は、エッセイとは何か、優れたエッセイとはどのようなものか、そして読む人の心を打つ作品を書くにはどんな心得、文章作法があるのか、などについて考える、という内容であった。「沖縄学へのいざない」は、今沖縄には本土から年間450万人の観光客が訪れ、中には2度、3度と訪れたり、さらには移住してしまう人もいるのである。何がそんなに人々をひきつけるのか——。かつて琉球王国と呼ばれたこの島の歴史、文化、民俗などに複合的に迫ってみようというものであった。幸い両講座とも50歳代、60歳代の主婦の方や定年退職された男性ら多くの方々が受講して下さった。皆さん、豊かな人生経験をお持ちの方ばかりなので質疑の場面では大変鋭い質問がユーモアを交えて飛び出すなどこちらが、教えていただいた点も多く、大変に楽しいひと時であった。

若い学問——「文化学」

学生たちへの数々の講義科目を通して、筆者の頭からいつもはなれなかったのは「文化とは何だろう」「文化学とは何だろう」という問いかけであった。まず「文化とは何か」である。文化人類学の祖といわれるイギリスのE・Bタイラー（1823-1917）によると、文化とは「知識、信仰、芸術、道徳、法律、風習その他社会の一員としての人間によって獲得された、あらゆる能力や習慣を含む複合的全体である」となる。またアメリカの文化人類学者C・クラックホーン（1905-1960）は「文化とは、歴史的に形成された明示的あるいは黙示的生活様式の体系であり、集団のすべてまたは特定の構成員によって共有されるものである」という。文化の定義は、文化人類学の発展によってはっきりとした輪郭を与えられたといえる。これらのことを踏まえて、筆者は「文化」に関するさまざまな講義の冒頭で「文化というと、皆さんはすぐさま音楽、美術、文学、演劇といった芸術的なものまず思い浮かべるでしょう。それは間違いではないが文化のごく一部であり、全体ではないのです。文化とは、生活の仕方や習慣を含めた意識と行動の様式。思い切って簡略に言えば、文化とは“生活の仕方”といってもいい」と説いたのである。次に「文化学とは何か」だが、この問いには回答がなかなか見つからない。

「文化学」という学問は確立されていないのである。「政治学」「経済学」「法律学」「教育学」などはそれぞれ学問として体系付けられ、認知されているが、「文化学」は確立しておらず、専門的に論じた書物もほとんどない。しかし「比較文化論」「現代文化論」「文化交流論」「地域文化論」といった「〇〇文化論」は認知されているのである。そしてこれらの各「文化論」も体系付けに当たっては、「現代文化論」のところで見たように、社会学、歴史学、民俗学、文学、宗教学、哲学など多様な専門領域を動員し、混血し、統合して考察を深めているのである。言い換えれば、文化論も文化学も学際的な性格のきわめて強い学問であり、これからおおいに発展する学問といえるであろう。

おわりに

「教えることは教えられることだ」という言葉がある。筆者なりにこの言葉の意味を考えると、こういうことではなかろうか。教師は学生たちにいろいろなことを教え、考えさせたりするがその際、教師が授業内容を完全に理解していないと、それは学生にはしっかりと伝わらない。聴講する学生たちの反応にそのことが正直に現れるのである。だから学生たちが授業に興味を示さないときは、授業内容に対する教師の研究、理解が不十分であることになる。逆に言えば、教師がその授業内容を深く理解するだけでなく、自分自身がわくわくするような感動、知的好奇心を持って研究していれば、学生たちは「先生、あの授業は本当に面白かったですね」といつてくれるのである。

学生たちは学問の厳しさ、楽しさを教えてくれた。筆者は社会学や哲学などの学会に参加して刺激を受けるとともに社会学、哲学、歴史学、民俗学、文学、政治学、など多くの専門書を紐解く必要に迫られた。そしてすこし研究になれてくるに従い、あらためて学問をすることの奥深さ、醍醐味、深い喜びに気づかされたのである。古代ギリシャの哲学、古代ローマ帝国の盛衰、キケロやセネカの著作、ヨーロッパ中世の再発見、西洋近代哲学史、歴史家ランケ、ブルクハルト、ホイジンガの著作、フランス革命、産業革命、日本人の起源と成立、古事記、日本書紀、大和朝廷の謎、邪馬台国の謎、網野善彦の日本中世史研究、柳田國男、宮本常一の著作などなど、あげればきりがないけれど、最近では上記のような事項に強い興味を抱いている。若いときの不勉強の反動だろうか、時間があれば、これらの研究書を読みたくてたまらないのである。